

# 死に触れた大能力者は 転生者

アステカのキャスター

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

空の境界よんで『直死の魔眼』スゲー!!

と思いつながらアニメのとある科学が面白い!!と言う事で書きました。後悔はない。続くかはコメント次第!!では行こう!!

# 目次

P r o l o g u e

目が覚めた世界線

---

1

連続虚空爆破《グラビトン》 | 16

幻想御手《レベルアップ》 | 39

無能力者《レベル0》 | 65

共犯者《バッドヒーロー》 | 88



# Prologue

## 目が覚めた世界線

目が覚めると其処には『死』が存在した。

見た事もない『死』が右も左も上も下も前も後ろも全てが頭に流れ込んでくる。このまま発狂死してしまいたいくらいの苦痛だ。だが、頭を抑えようにも手が無い。足もない胴体もない顔も痛む頭も存在しない。

いや、見えているこの視界すら側から見たら眼すら存在しないのかもしれない。

ここはどこだ？ 俺は誰だ？ なんて最早どうでもいい疑問だった。

オレには、地に足もついていなければ、浮いているという感覚さえない。何も分からない。何も無い。ただ苦痛が頭の中で暴れまわっている。

意識も。時の流れも。全てが、消えゆく蠟燭のようで。

霧がかかった頭の中、感覚も何も無いというのに、堕ちているという事だけが、分かった。

『……………ッ?!』

目が覚めると其処は街だった。ただ、自分は立っていると言う感覚こそあるものの、姿は全く無い。俺はさつきまで会社にいた後に車に轢かれた記憶があり、それから思い出すだけで吐きそうな苦痛が頭の中に入り込んだと言う事だけだ。

ただ、周りに見えているものが赤い線や点のように見える。それを見ただけで吐き気がする程気持ち悪い。吐く肉体は存在しないのに……いや、先ず問題は俺の体は存在していないと言う点だ。

『……………この現象って………転生?』

よくある異世界漫画には神様転生と言うのが存在するが、肉体がないとはどう言う事だ。スライムボディでもいいから欲しかったと先ず一つ。問題は其処じゃない。今自分には足は無いし腕も胴も首も頭も無いのにこの世界を歩いている事、この世界を視れている事だ。

自分が仮に精神体だとするならば、俺は一体何だ?

それに、見えている赤い線や点は間違はなくアニメで見た事のある現象だ。それはTYPE—MOONの『空の境界』や『月姫』である主人公の特異な力。『直死の魔眼』と同じ風景が見えている。確か万物には『死』の綻びがあつてそれが見える人間がなぞればどんな物であれ殺せる代物だった筈。正確には存在の意味を殺すだったか？

いや、そんな事よりもこの記憶はなんだ？

今の自分の名前は■■■■の筈なのに、全く知らない別の人間の記憶がある。まるで自分が体験したかのようなそんな感覚だ。

『……とりあえず俺がどうなっているかは正直どうでもいいが、この世界はいつたい何なんだ？』

TYPE—MOONの作品はどれも血生臭い物が多い。埋葬機関やら聖杯戦争やら色々転生させられたら死ぬイメージが多い。と言うか肉体が無い以上サーヴァントや魔術師としての線は消えた。

『つまり、死んだ後の霊体なら幽霊つて線で空の境界の可能性が高いけど、それやばく無いか？ 式に殺された記憶があるんだけど』

早くもバッドエンドの道筋が見えた。

いや、違う。空の境界なら逆に俺が直死の魔眼を持つのはおかしい。神様がくれた特典ギフトなのかもしれないのに殺しに来たりはしないだろう。

『つまり……この世界はTYPE—MOONの世界じゃない？ いや、そもそもアニメやラノベと同じ現象が起きてるだけでその世界線に居るって仮定する事が問題か？』

「う〜い〜は〜るっ！」

突如聞こえた掛け声と共に、その人影——中学生くらいの女子は花冠の同級生のスカートを勢いよく捲り上げた。

花冠の同級生はしばらくの間現実を受け止められず、ひらひらとスカートが自由落下により元の位置に戻った頃、ぼんつと顔を真つ赤に爆発させ悲鳴を上げる。

「きやああああああ〜〜〜〜！！！！」

まるで痴漢に遭ったかのような鋭い悲鳴。

流石にその事に驚愕した……いや、それ以上の事に驚愕している。



「なにするんですか佐天さんいきなりなにするんですか！」

顔をこれでもかというくらい赤面させてぶんぶん両手を振り回し不満をぶつけてくる花冠の女の子のリアクションに内心癒されながら、中学生くらいの女子は笑顔で応対する。

「いやあく相変わらず可愛いパンツだね♪ だけど初春、君の笑顔はもっと可愛いぜ♪」  
「自分で捲っておいて何言ってるんですかあ〜!!!」

嘘だろ、と言いたいくらい現実是非常だ。

ここはTYPE—MOONの世界ではない。電撃文庫作品でアニメ化が3期まであつた超有名作。

『とある科学の超電磁砲』で登場する初春、佐天と言う名前、余りにも特徴が似過ぎていて間違いようがない。

この世界は『とある魔術の禁書目録』だ。

「あつ、危ない!!」

突如街を歩く人が上を見上げ叫んだ。それは工事中に支えていた鉄柱が風でバランスが崩れかかっている事だ。そしてその落ちる地点に居るのは……

『つつ!? クソツ!!』

気付けば俺は走り出していた。

いや待て、走った所で何になる? 肉体が無ければ誰も俺と言う存在を認識していない。そんな俺があの人を助けられるのか? だが走っている足を止める事はしなかった。大地を踏み締めている感覚があるなら、物理的に考えれば俺は確かに存在している筈だ。突き飛ばすくらいなら出来る筈だ。

『間に合えつつ!!』

突き飛ばそうとする手は2人には触れられない。

それどころか、透過で擦り抜ける事も無く何か<sup>に</sup>呑み込まれていく<sup>感</sup>がある。気が

付けば俺の腕の感覚どころか足の感覚まで消えている。

次の瞬間、視界が変わった。

いや、正確には縮んで小さくなった？

さつきまで軽かった身体が重くなり、何か重石をつけたようだ。思わず俺は自分の姿を見る。

そして見えた姿は女子の学生服と見知らぬ肉体が今の俺の姿と信じるまでに一瞬硬直した。

「両手が……」

「佐天さん!!」

いや、今はそんな事どうでもいい。肉体がある以上死の線がなぞれる事と同義だ。死の線が見えているのは人間だけじゃない。空も、空気も、空間も存在するのであるならば……

『直死』

死は線と点で見えるもので、強度を持たない。

「死の線」は存在の死に易いラインを表し、線をなぞり断てば対象がどんなに強靱であろうと切断される。だがアレが降る前になぞるのは厳しい。なら、空間を切断したら一体どうなる？

何にもないものを切断する意味は本来ならないし、予想がつかない。だが、失敗して死ぬより失敗する前にやる価値くらいはある筈だ。

俺はそこか細い腕で空間の死の線をなぞった。

そして次の瞬間、

鉄柱が消えた。

『……はっ？』

一体どう言う事だ。何故空間を殺したら鉄柱が消えるのか理解が出来ない。普通に斬撃が飛んでいくかと思つたら鉄柱が一瞬で消えるってどう言う事？

『いや、助かったならいいか……』

「佐天さん!!」

『ぐはっ……!』

花冠の女の子、初春が飛びついてきた。

すると俺も身体を制御していた感覚が消えている。目の前に佐天が初春に抱き付かれている。その衝撃で俺も佐天の肉体から抜けたらしい。

今のは間違いなく憑依だ。今、佐天の身体に乗り移つて『直死の魔眼』を使った。つまり、今の俺は精神体であり、念話能力で演算を補強するのと同じく、能力を貸し与えたと言う事になる。

いや、そんな事があり得るのか？

「無事で良かったです……!!」

「ちよっ! 泣かない……っであれ? 何が起きたんだっけ?」

佐天は覚えていない。

憑依された佐天には記憶が無いようだ。

『つまり、今の自分は精神体であつて幽体離脱状態。しかも別人の記憶がある事から成り代わりに近いと推測できるな』

記憶で分かる事はとりあえず四つ。

一つ目が名前、俺の名前は黒羽式くろはしきと言うらしい。俺も全く理解出来ないが、俺は黒羽式の魂に乗り移り、成り変わった。ふっ、この時点で訳がわからん。

二つ目が能力、俺の能力はLevel4の『AIM補強リフォース』と言うらしい。この能力は中々強いが、俺自身には意味があまりない。出来る事はAIM拡散力場を観測し、自身のAIM拡散力場から他者のAIM拡散力場に影響を与え、能力を向上させる能力だ。最大で無能力者のLevel0からLevel3まで上げたとか。やべーな黒羽さん。

三つ目が俺自身は、■■■■は死んだ。そしてその後『とある魔術の禁書目録』に何

故が存在している。

四つ目が最後の記憶があやふやで唯一思い出せるのは金髪の女の子を助けた後、黒羽式は死んでいるのか生きているのかさえ分からないと言う事だ。黒羽式の記憶にある肉体が無いのは黒羽式も死んだかもしれないと言う事だ。

『しかし、黒羽式もヒーローになりたかったのか？ この世界は一体どうなって……』

「だ、誰ですか？ この声？」

『うん？』

あれ？ 聞こえてる？

いや、聞こえてるのは佐天さんだけだ。初春は全く分かってないようだし。試しに話してみるか？

『……聞こえてるのか？』

「は、はこ」

おいおい、まさか。

今の俺は霊体化したサーヴァントみたいなものなのか？

『なるほど、一度憑依した人間にはパスが繋がるのか。いや魔力体って訳でも無いし、能力の副産物？』

「ど、どちら様ですか？」

『まあ……幽霊かな』

神妙な顔をする佐天さんが居た。

とりあえず、分かった事は今の俺は『とある科学の超電磁砲』のキャラに憑依擬きが出来るとある魔術の禁書目録』の世界線にいる事だ。

「イレギュラー異分子が見つかった、だと？」

「ああ、それも中々強大なものだ」

学園都市の中枢——第7学区、窓の無いビル。



内部に一切の照明が存在せず、しかし常人には理解の及ばないような複雑な演算を繰り返し、制御する大量の計器類が発する光が暗闇を薄ぼんやりと照らすようなそんな空間に、忌々しげな男の声が響き渡った。声の主は、場違いな印象を見る者に与えるだろうアロハシャツに身を包んだ金髪の男、土御門元春。彼は空間の中央——黄色く照らされた液体が入った巨大な生命維持装置ビーカーの中に逆さまになって浮かんでいる男に向かってそんな言葉を投げかけた。

そしてビーカーの中に浮かぶのは、男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える男、学園都市の統括理事長。アレイスターⅡクロウリー。対峙する2人の男は、宙空に展開されたモニターを見つめていた。この窓のないビルと同じ学区のどこかで繰り広げられている光景。

「しかし同時に愉快なものでもあるだろう。この程度ならプラン短縮のいい機会になる」

「異分子イレギュラーに対して随分悠長な事を言うとはなアレイスター。一体何が異分子なのか俺には分からないが、それは放っておいて大丈夫なのか？」

「構わないさ。たかが1人の登場で世界が変わるならまだしも、1人では何も出来ない小さな存在さ」

佐天涙子は無能力者だ。

パラメーターリスト

素養格差でも成長の見込みは無いはずなのに、彼女は鉄柱に対して『0次元の極点』をやつて見せた。

この世界においてn次元の物体を切断すると、断面はn-1次元になる。3次元ならば2次元、2次元なら1次元。ならば1次元を切断すると0次元になるはず、という理論を基礎とする。

現在の所、0次元は誰にも観測できていないが、

上記の理論に従うのなら、『1次元の点』を切断できれば引きずり出せる筈である。しかし、現状では具体的な手段が存在せず、机上論となっている。あまりにも空想的な理論を実際にやつてのけた。

アレは3次元、2次元、1次元を全て殺した故に発生したバグ。本人には消えた理論さえわからないだろう。

使ったのは佐天だが、恐らくその背中にはナニカが存在する。アレイスターの中でに結論は出ている。

『万物の死を読み取り、対象に死を与える力』か。ふふ、中々愉快的な異分子が転がり込イレギュラー

んだものだ」

アレイスターは密かに笑った。

## 連続虚空爆破《グラビトン》

風紀委員一名が「爆弾」による重傷を負った。

これは、それまでイタズラとされてきた謎のアルミ爆弾事件と同一犯と推定。

風紀委員は『連続虚空爆破事件』として、犯人捜索を本格的に開始。

書庫による能力該当者は一名。

彼女——大能力者レベル4の釧路帷子は、事件発生以前から原因不明の昏睡状態。鉄壁のアリバイがあった。

こうして、風紀委員は手がかりを失った。

「物騒な話だね……」

「そうなんですよ……しかも容疑者にはアリバイあり。事件は難航どころか手がかりすらないんですよ？」

帰り道、初春と佐天が一連の事件について話していた。初春は風紀委員ジャッジメントである為、何の手掛かりも掴めなかつたことに落胆する。

「(どう思いますか? 黒羽さん?)」

『……重力子グラビトンがアルミを爆弾に変えられる能力者一人だとすると、分からない。ただ、愉快愉快犯つて訳ではない気がするな』

佐天の近くで欠伸をしながら会話していた俺こと黒羽式はどういう訳か佐天涙子から離れる事が出来なくなっていた。

いや、正確に言うならサーヴァントのようにパスを繋いでしまった為、一度入った身体に定着しつつあるのかもしれない。多分。そこら辺は魔術の領域だ。詳しくは知らん。

肉体による死が定着してしまったせいか、肉体に宿す魂が離れ離れになる幽体離脱的現象、更には仮初の肉体に乗り移り、死の魔眼であらゆる万物を殺せる存在。こんなものが居たらイギリス清教も頭を抱えるだろう。今、俺が正に存在しているけどな。

佐天には『オカルト的な幽体離脱のせいで、一度乗り移って能力使ったら離れられなくなつた』と言つたら、何と大喜びしていた。よくよく考えたら都市伝説好きだつたこ

のJ.C。

まあそれはさておき、犯人を知っているのにはぐらかした理由は、佐天に『レベルアップ幻想御手』の存在を知って欲しくないからである。原作で、犯人の介旅初矢はLevel 2の『シンクロナロン量子変速』だが、レベルアップ幻想御手による、学習装置と言う名の代理演算の道具で、能力が向上した代わりに、意識を失った。

原作通りなら佐天がレベルアップ幻想御手に手を出して意識不明になる。今は俺が居るとしても身体の主導権は佐天にある。彼女の身体で原作改変なんてあまり無粋な事はしたくないが、意識を失ったら俺自身がどうなるか不明な為、出来る限り明言しない方がいいのだ。

憑依中の佐天の意識は、無いというか、何というか、夢の中にいる感じらしい。ただ夢と気付いた瞬間、主導権を総取りされて色々面倒、とだけ言っておく。まあレベルアップ幻想御手の事なんていつかはバレル。遠ざけておきたいし、もし手に入れちゃったなら止めたいとは言え、能力を持つ俺が能力を持たない佐天に励ましの言葉を出した所で、つて話だ。

『(……まあ、それ以前にパラメータリスト素養格差で格付けが決定されてる以上、救いなんてないんだけどな)』

この学園都市では既に能力を得られるかの未来は決まっている。残念ながら佐天は Level 0のまま……いやちよつと待て？ Level 0の佐天がああ鉄柱を消したアレって結構ヤバいんじゃないか？ 滞空回線アンダーラインでアレイスターにバレている筈だし……。

……いや、気にしちゃ負けだ。どの道、黒羽式が学園都市で生きている以上バレる話だ。佐天の身体で使ってしまった以上、目を付けられても暗黙の了解な筈だ。上条当麻の様に放っておく事を祈るか。

『……佐天、事件を解決したいなら3つの事を覚えておけ』

「(事件について何か心当たりが!?)」

『違う。だが、事件の解決に必要なのはハウダニット、フーダニット、ホワイダニットだ』

「(はっ、ほうだ……?)」

『……つまり、どうやって事件を起こしたのか？ 誰が起こしたのか？ どうして起こしたのか？ つて事だ』

「(えっと、犯人は能力でアルミを爆弾に変えたから……と、誰かは分からない。理由が愉快犯の仕業?)」

能力は『量子変速』  
シンクロナイトロン

アルミを爆弾に変えられる能力者はLevel4クラスだが、アリバイがある為不可能。だから犯人は不明。

なら目的は？ 目的とはなんなのだろうか？

それがホワイダニットだ。犯人の動機は……

『最後のホワイダニットだけは別だ。何故起こしたのかと言うのは、必ず明確な理由がある。愉快犯って可能性も無くはないが、動機は話が別だ。犯人は何を狙っているのか？ 犯人は何を目的としてそんな事をしているのか？ ……さて、予想は？』

「(い、悪戯とか?)」

『残念、0点だ』

「(ええ……)」

ガツクリとする佐天。悪戯の理由を聞いているのに悪戯と答えてどうする。やはりこの世界では佐天さんは頭が少し悪いようだ。

能力の差で劣等感を生むこの街は憎悪を生みやすい。この事件の答えを知っている俺も、黒羽式と言う存在もイレギュラーだ。



実際には物語に登場はしなかったが、この世界に居たかもしれない存在。それが俺、黒羽式だ。

御坂と佐天と初春はセブンスミストへと歩いていった。

働き通しの白井や初春に息抜きをと佐天と御坂が企画したが、白井は仕事が片付かず参加出来なかった。

初春は『なら私も……』と自分も仕事をしようとしたが、白井が二人に悪いから初春だけでも参加してこいと送り出したのだ。

「そっか……白井さん、来れないんだ」

「ええ。でも、元気そうですよ。お土産を色々とリクエストされちゃいました」

「なら、こつちも目一杯楽しみましょう。そして、お土産持つて支部へ陣中見舞いに行きましようよ」

そんな風にワイワイ騒ぎながら、セブンスミストへ入っていく一同。

その中のある一点。初春の右腕の腕章を、介旅初矢が醜悪な笑みを浮かべながら凝視していたのを黒羽は気配で捉えていた。

「初春、こんなものどう?」

「ひ、紐パン!? む、無理です! こんな穿けるわけないじゃないですか!!」

「え。でもこれなら、あたしにスカート捲られても恥ずかしくもないんじゃない?」

「むしろ恥ずかしいですよ! ていうかそもそも捲らないでください!」

御坂は佐天と初春のやりとりに苦笑しながら見守る。彼女達は女子中学生らしく全力でショッピングを楽しんでいた。佐天は凄くウキウキしながら初春をいじり倒している。それに欠伸する黒羽。ぶっちゃけ物欲や性欲とか身体が無いから特に無い。

最近、初春が風紀委員ジャッジメントの仕事で忙しくて寂しかったのかもしれないのを見た佐天が初春を構い倒していた。

「あ、そういうえは御坂さんは何か探し物があります?」

「え、そうねえ……パジャマ、とか?」

「それならこつちですよ！」

佐天が御坂に尋ねると、初春が話の矛先を変えるべく、我先にとパジャマ売り場へ先  
行する。

「色々回ってるんだけど、あんまりいいのが置いてなく……て……」

御坂の目がある一点で止まる。

そこには、なんていうか、その、かわいいを極めたようなピンクに花模様の、対象年  
齢が幼そうなパジャマがあった。小学6年生くらいが着るような幼さ満点だが、御坂の  
目が輝いている。すでに心を驚掴みにされていた。

「ね、ねえ！ これ、すごくかわ——」

「うわあ、見てよ初春このパジャマ。今時こんな子供っぽい着る人いないよね」

「小学生の頃は着てましたけど、さすがに今は……」

「そうよね！ うん！ 中学生にもなつてこれはないよね！ うん！」

現役J.Cのまつすぐな意見にちよつと泣きそうになりながらも、必死に合わせる御坂J.C。それを見た黒羽は若干笑いつつも、僅かばかりの焦りがあった。

かつて……いや、物語の中で第二位の垣根帝督は言っていた。『異物と言げんさくう物は存在しただけで法則すら変えてしまう』。もし、イレギュラーとして俺が物語を変えてしまったら、この事件は一体どうなるのか。

『佐天、ちよつといいか?』

「(はい? 何ですか黒羽さ——)」

『ホワイダニツトの理由を白井に電話して聞いてくれないか?』

「(……えっ?)」

『頼む』

「(わ、分かりました) 初春、悪いけどちよつとトイレ行つてくる」

「はい、これ買いに終わったら三階の洋服店に居ますね」

本当なら答えを知っているが、佐天に憑依した時に起きる原作のズレ。佐天に憑依出来る以上、ある程度は自分で何とかしたい欲求はあるが、危険は早めに排除しときたかった。

一方で……

御坂はまだこのパジャマから目を離せなかった。

(……いいんだもん。パジャマなんだし、誰に見せるわけでもないんだから)

誰も聞いてないのに心の中で必死に弁明しながら、横目で佐天達の様子を確認し、素早く手に取り姿見で合わせる。

そこには、自分以外にツンツン頭の少年が映っていた。

「何してんだ、ビリビリ?」

「ぬわっ! な、なんでアンタがここにいんのよ!」

思わぬ所で2人はエンカウントしていた。黒羽的には見たかったのは有るが、それ以上この後について色々考えていた。

---

本来なら必要はない。

だが、自分が関係してしまつて、もしヒーローと言う存在がその場に居なかつたら？と考へてしまう。上条当麻に接触はしていない以上、原作は崩壊する事はないと思ふ。だが、万が一が怖い為、俺は答を促すしかないのだ。

「(それで……事件についてですよね)」

『佐天、前の答は変わったか?』

「(……復讐……とかですか?)」

『その心は?』

「(分かりません……けど、必ずしも誰か怪我してるから……つてもしかして、特定の人を狙つてたりします?)」

『80点やろう。答は白井に聞いてみる』

佐天は白井のいる177支部に電話をかける。

何故か嫌な予感がする。見逃したら一生後悔するような気がしてならない。若干の焦りが有りつつも177支部の番号を入力した。

『もしもし、風紀委員ジャッジメントですの』

「白井さん！ もしもし、佐天です」

『佐天さんですの？ ああ約束の件は申し訳あります——』

「例の連続虚空爆破事件！ 何か共通点とか有りますか？」

『はあ？ 何を言ってますの？ 共通点？』

「ホワイダニツト！ 犯人が事件を引き起こす理由ですよ！ 例えば、狙われた人が全員同じ学校の生徒とか！ 同じ学区とか、怪我した人達全員に共通するものです!!」

どのようハやウったダのか、誰かフやダったニのかは書籍バンクを調べれば、分からないものではない。能力さえ分かれれば、誰がやダったのかは芋づる式で出てくるからだ。

だが、もしそれが判らなかつた場合は別方向から調べるのだ。何処ウエでやダったのか、何時ウエやダったのか、から動機。何故ホやダったのかを見つけるのが定石、それが事件を解く鍵だとロードエルメロイー世IIが言っていた。

先生マジかつこいいです。一生大ファンです。

『共通するもの……？ そんなの有る訳……あつ!! それですわ!! 事故の中心地にい

る人には必ず風紀委員ジャッジメントが怪我を『白井さん！　これ！　衛星が重力子の爆発的加速を観測したって!!』——つつ!?』

「……えっ?」

『佐天さん、時間がありません!!　今から言う事を良く聞いてください!!　ついさつき衛星が次の爆発の予兆を感じしましたわ!　場所は——』

そして、その予感予感は現実となる。

狙いは風紀委員ジャッジメント。そしてその標的ターゲットとなった存在は、

『今貴方が居る第7学区——セブンスミストですの!!』

友達ういはるが危ない。

気が付けば佐天は既に走り出していた。

「白井さん!　避難警告は出したんですか!?!」



『もうやってますの!! 初春が狙いなら必ず犯人は何かしらの爆発物を渡してくる筈です!! 佐天さんも避難警告に従ってください!』

「そんな事言ったって初春が……!!」

佐天も今回ばかりは焦っていた。

いや、この事件の狙いが風紀委員ジャッジメントと分かった以上、この場所で狙われる標的は初春の可能性が高い。

黒羽は佐天に爆弾が何なのかを伝えた。原作知識には確か……

『おい佐天!! 女の子の持つぬいぐるみ!! 多分アレが爆弾だ! あんな人形、あの子は持つてなかった!!』

「白井さん! 爆弾っぽい物を見つけました!!」

『なっ……!!? 佐天さんそこから離れ』

『そのまま走れ!! 俺が処理する!!』

佐天は電話を切って女の子に向かって走っていった。

黒羽の魔眼なら可能な筈だ。重力子の加速もアルミの存在の意味を殺せば、爆破は起

きない。

「出来るんですか!？」

『可能だ! だから身体を貸せ!!』

「はい!」

佐天の中に何か不思議な感覚が駆け巡る。

瞳は黒目から蒼くなり、見える景色の至る所に線や点がありふれて見える。佐天自身の意識は一瞬無くなり、主導権が黒羽に変わる。

「『っ! 後で返すから借りるぞ!!』」

百均のカッターナイフを取り、ぬいぐるみみの少女を探す。

さっきの女の子は初春を探しにエレベーターで下に向かった。避難警告から避難誘導は大体終わった。本来なら上条の出番かもしれないが、ここまで事件に首を突っ込んだ以上、後戻りは出来ない。

二階を走り回っていると、初春の声が聞こえた。そして、その近くにいる女の子のぬ

いぐるみが変わり始めた。初春がその子の人形を持って後ろに投げた。

「逃げてください！ あれが爆弾です！」

今の佐天の位置は初春達の反対側、初春は佐天に気付けずに爆弾も此方に投げ、今の佐天には上条の背中の中の防衛ラインに入る事が出来ない。普通に避けようとした所で爆破に巻き込まれる。ならやる事は決まっていた。此方に投げてきたのなら都合。

——爆破される前にアレを殺す。

『直死』

万物には綻びがある。

それは生きている物、存在している現象、法則、理論にさえこの眼には通用しない。物理現象による爆破、重力子の加速によるアルミ材の爆破。なら、重力子もアルミ材も存在する意味を殺せば……!!

「佐天さん!？」

視える死の線は少し青く、そしてやや黒みを帯びている。  
それを黒羽はカッターナイフで強くなぞった。その瞬間、青くなった死の線がぬいぐるみから消失した。

「『悪いな。——夢の終わりだ』」

ぬいぐるみは安物のカッターナイフで切れたとは思わなくらい綺麗に解体されバラバラになった。中に入っていたアルミ製スプーンの重力子の加速は殺され、爆弾としての機能は消え去っていた。

---

介旅初矢は路地裏で呻いていた。

「なぜだっ！ なぜ爆発しなかった!!」

これまで、数回を重ねその度に威力を調べていた。

元々は異能力者だった介旅だが、胡散臭さがありながらも試した例のアレを使い始め

て以来劇的な成長を見せ、今や大能力者<sup>レベル4</sup>の中でも上位の出力を誇るまでになっていた。前兆がわかりやすいこともあってこれまでは重傷が関の山だったが、今回こそは死人の出るほどの威力を発揮できる。前は入院させるレベルまでの力を発揮した。だから今回はそう確信していたのだ。

だというのに、ここに来ての不発。こちらに手落ちがなかった以上、何者かの邪魔が入ったとしか考えられなかった。待てど待てど爆発は起こらず、ついに標的の花飾りの風紀委員は爆弾を持たせた少女と共に無傷で建物から姿を現した。

「ありえない！　ありえない！　次だ！　次はもつと威力の高い奴を！　この力で無能な風紀委員も！　あの不良共も！！　みんな、みんなまとめて——」

ドガツ！　つと吹き飛ばされた。正確には蹴り飛ばされた。

無様に地面に全身を打ち付けた介旅は、状況を理解できず蠢く。顔を上げると——そこに居たのは、

「『要件は、言わなくても分かるよな？　爆弾魔』」

片手に切断されたスプーンを持ち、佐天の身体でニヒルに笑う黒羽だった。アレは介旅がぬいぐるみに入れたスプーンだ。それを見た介旅は怒りに震えた。

「お前か！ お前が、お前が僕の邪魔を……!!」

「『おいおい、爆弾なんだぜ？ 使われたら他の人達巻き込むだろう。だから解体するに決まってるんじゃない』」

「ふざけるな!! そんな理由で僕の邪魔を——!!」

元凶を前にした介旅は一瞬で激昂した。

解体するなんて簡単じゃない事だ。重力子の加速を止めるなんて同型等の能力か、それ以上の力で対処し無ければ不可能だ。己の能力に軽々と対処できることになるのだが、怒り狂った介旅は思い至らない。

「するなあ!!」

カバンからアルミのスプーンを取り出し、大きく振りかぶる。そのまま目の前の邪魔者を抹殺せんと力強く投げ放つが、黒羽はそれを意にも介さないため息をついた。

向かってくる爆発寸前の投げられたスプーンの死の線をカッターナイフでなぞる。それだけでスプーンは容易く切断され、重力子の加速も消え去っていた。

「……………はっ?」

「『お前の能力、アルミを爆弾に変えられるけど、複数を爆弾には出来ないんだろ? 仮にもチートを使ったLevel4クラスだ。視えた色は少し汚いが、有象無象のヤツよりマシだ』」

「…………何を、何をしたんだお前は!」

「『重力子の加速もアルミ製であったスプーンの性質も全部殺しただけだ。いや、殺しただけってのはおかしな話か』」

苦笑いしながらも黒羽は続けた。

重なったイメージを元に、介旅に死が視える眼で見据えていた。

「『万物には全て綻びがある。人間は言うに及ばず、大気にも意思にも、時間にだってだ。俺の眼はね、そう言ったモノの死が視えるんだ。だからおまえが使った重力子の加速もアルミであったスプーンの性質も斬り殺せる。スプーンの強度もナイフの切れ味すら

関係なくな』

それは殺意。

黒羽式が持つ魔眼がヤツを殺したいと言う思いで埋め尽くしている。にも関わらず、その殺意は冷淡で冷酷な程、次の自分を綺麗に殺せると言う芸術的なナニカを感じてしまっている。

それは余りにも美しく、冷酷な殺意だ。

それを見せる黒羽は介旅を見ていない。介旅より上の遙か先の誰かに真正面から啖呵を切った。

『だから、俺が存在している限り、

——生きているのなら、神様だって殺してみせる』

カッターナイフを構えて真正面から宣言した。

その眼はもはや介旅を見ていない。眼中にすらない。脅威とも思われなければ、有象無象の一人と決めつけて見下されている。



「いつもこうだ……何をしても……何もしていなくても……こうして僕は、いつも地面にねじ伏せられるっ」

介旅はゆつくりと起き上がり、黒羽を渾身の力で睨みつける。

黒羽は動じない。気にも留めない。コイツにはそんな価値すらないと言わんばかりに。

「殺してやるっ……お前らはいつもこうだ！ お前らはいつもそうだ!! ジャツジメントも同じだ！ 力のあるやつは……みんなそうだろうが!!!」

『お前の能力の劣等感なんて関係ない。お前が狙ったのはコイツの友達だ。これ以上、コイツの友達に手を出してみろ。次は四肢を殺して標本にしてやる』

その殺意が介旅に向けられる。

それだけで呼吸が止まる。殺意を向けていたナニカ以外、黒羽は眼中に無かった。だが、その殺意が本格的に向けられると自分の死を明確に悟り、冷や汗が止まらない。身体は情けなく震えて恐怖で身体も動かさなければ声も出せない。

「『まあ、この後は風紀委員ジャッジメントの仕事だしな。俺が手を汚すまでも無い。だが……』」

黒羽は拳を握り締めた。

殺しはしない。佐天の身体でそんな事をする様な殺人鬼ではない。魔眼から流れる殺人衝動を抑え込みながらも、苛立ちを隠さずに拳を振るった。

「『これはコイツの友達を狙った八つ当たりだ。お前がやってきた事を存分に痛感しやがれ、この大馬鹿野郎』」

黒羽の拳が介旅の頬に鋭い痛みを残し、背を向けてセブンスミストに戻っていった。介旅はただ呆然としていた。あの殺気に当てられて、まるで世界が変わったかの様だ。

あの殺気を向けていたのは誰だったのか。

介旅は知る由もない。

## 幻想御手《レベルアップ》

「37.3度。まあ微熱だけど、今日一日はおとなしく寝てな」

「すみません、佐天さん。……ゴホツ、ゴホツ」

「あくいいから、いいから。じつとしてなつて」

ここは初春の寮の部屋。初春は顔を赤くしてベッドに横になっている。そこに学校帰りの佐天が薬を届けがてら様子を見に来たのだ。

因みに御坂も白井もお見舞いにこの部屋にいた。白井に関しては単なる現状報告もあるのだが、白井も色々疲れており小さなテーブルに伏していた。

「昨日あんなことがあったから。疲れが一気に出ちゃったのかもね」

「……………佐天さんが私のスカートを捲ってばっかりいるから、冷えちゃったんじゃないんですか?」

「いや、そこは初春の親友として、毎日パンツを穿いてるか心配で」

「穿いてますよ！ 毎日！」

「あはは、分かっているから病人は寝てなさい」

「今、冷たいタオル用意してあげるからさ」

母親のようにテキパキと家事をする佐天。

動いていると、佐天自身の身体に違和感が生じている。感知出来なかったものが感知出来るようになった気がした。正確には自身の周りに何か動いていると言う十二カ。身体がいつもより感受性が高くなって、まるで見えない鎧みたいなものが身体を覆っているようだ。

『……AIM拡散力場の同調、もしくは変質って所か』

「(変質?)」

『詳しくは調べないと分からん。だが、佐天の『自分パーソナルリアリティだけの現実』が俺と言う存在によって無意識に構築する世界が俺の構築する無意識の世界に干渉し、本来発せられる力より更に強くなっているのかもしれない?』

「(じゃ、じゃあ! もしかしたら私も能力者になれるんですか!?)」

『演算出来なきや無理に決まってるだろ。だが、自分の発せられる拡張範囲が広まっ

たつて事は、ある程度なら感知程度は出来るかもな』

と言うか、それを逆に言うなら佐天と言う存在が黒羽式の人格に変わりつつあると言う事だ。佐天が黒羽式に成り代わると言う現象から起きた能力的なバグ。陽と陰、対極である存在。『空の境界』で言うなら両儀織と両儀式の2人。両儀織が死んだ事により両儀式は両儀織の代替行為だった故に起きていた。

じゃあこの場合は？

佐天が黒羽になりつつある。型月で存在するなら侵食現象、『Fate』の世界線では衛宮士郎が英霊エミヤに置き換えられたせいで爆発的な力を宿したが、それは自分が自分で無くなるというデメリットが存在した。もしそれと同じなら……不味いのかも  
しれない。

『（早く今の俺の現状を調べてみないと如何にもならん。だが、肉体は死んでるわけじゃない。脳が稼働している以上、元が存在する筈だ）』

今の俺は何処かの病院か、研究所か。

能力もA I M拡散力場に干渉出来る滝壺の上位互換だからかなり希少である。補強

出来るって事は、妨害する事すら出来る。能力系統関係なく直接干渉出来る能力、それが俺の能力だ。

病院も研究所も、合わせて学園都市には300は超えているだろう。どう見つけ出すか……

「そういえば佐天さん。私も佐天さんに聞きたい事があつただけど、重力子グラビトンを爆発させなかつたあの能力。アレ何だったの？」

「あゝ、何というか。能力を借りてるって言うか」

「能力を借りてる？」

「まあ、とある事情で能力者の意識が私に乗り移っちゃって、そこから能力を引っ張り上げる……みたいなの」

出来る限り、俺の事は伏せている。

佐天は普通の女の子だし、男の意識が常時ついて回るとか言ったら犯罪臭がするし。結局のところ対処法として思い浮かぶのは上条の幻想殺しくらいだ。

「そんな事が可能なんですの？」

「実は……私も微かにそれが視えてるんですよ。初春、このペットボトル捨てるなら実験に使っていい？」

「はい。構いませんけど……」

はっ？ 何で言ったこの子。

微かに視える？ それってまさか……次の言葉を聞くまで全く理解出来なかった。佐天が使った言葉は……

「直死」

佐天の瞳は僅かながら青色を帯びていた。

佐天はペットボトルを軽くなぞると、ペットボトルは刃物で切れたかのように綺麗に切断された。

間違いない。今佐天は直死の魔眼を使いやがった。しかも意識の入れ替えはなく、微かに視えた程度かもしれないが、これは間違いなく侵食現象だ。黒羽式に成り変わっていつてしまう現象で、自分が自分で無くなってしまうデメリットだ。

「なっ!？」

初春は驚愕する。

佐天はLevel10の無能力者だ。それは近くにいた初春が一番知っていたが、今は間違いなく能力を使っていた。

「……佐天さんの能力って切断系統の能力？ 分子レベルの粒子切断か念動力か……いやでもなぞっただけで切断出来る能力って」

「あはは……えっと、使い手が言うにはどんな物体にも死が存在していて、使い手にはそう言ったモノには綻びがあつて、その綻びが線や点で見えるらしいんです。それをなぞると対象の存在している意味を殺せるって」

「存在している意味を殺す?」

白井は頭を傾げる。

存在に死を与えろと言うのは、生きているものが存在している意味を無くすと言う事だ。



「簡単なので例えるなら御坂さんは磁力で鉄を操れますよね？　けど、私が殺した鉄と言うのは鉄の硬さは残っても鉄だと言う性質そのものは意味が殺されてるから磁力で操れない……らしいです」

「なっ……!!?　聞いた事無いんだけどそんな能力!?!」

当然、学園都市の書庫には無いだろう。

直死の魔眼はこの学園都市以前に、この世界に来てから手に入れたものだし。いや待て、むしろバレるリスクを考慮しても、この世界の黒羽式と言う人間を調べるチャンスじゃないか？

『黒羽式、それで調べてもらえ』

「白井さん。書庫に黒羽式さんって男の人、居ますか?」

「黒羽式……ですが興味本位で書庫にアクセスするのは……」

「えつと、黒羽式。Level 4の能力者で能力は『AIM補強』。対象とした人間のAIM拡散力場に干渉する事で能力の補強、妨害、感知が可能。ただ一年前に昏睡状態により、病院に搬送。それ以降は不明。佐天さん、この人に能力を補強してもらってるの?」

「ちよっ!? お姉様!!」

勝手にハッキングしている!?

それでいいのか超能力者!? いやまあコイツの場合知りたくなったら止まらない性格だし、『私、気になります!』のとあるバージョンだから仕方ないのかもしれないが。

「病院の場所も不明。一体何処にいるんですの?」

「補強……確かにそれなら辻褄は合うし、居場所も不明つてのが怪しいわね」

『ちよっ!? 俺が犯人候補にされてねえ!? 冤罪だ冤罪!! そもそも、俺は何故か佐天から離れる事が出来なくなっただつてのに他の能力者の補強なんて一々出来るか!!』

「あはは……まあ黒羽さんは犯人じゃないですよ。私が保証します」

「まあ昏睡状態の人が他人のレベルを上げるのは現実的ではありませんの。佐天さんのあの能力も正直理論的には理解出来ませんし、佐天さんの能力が空力<sup>エアロハンド</sup>使いな以上、その能力は全くの別物と考えるとよいでしょう」

「多重能力者……ねえ」

まあ今の佐天は考えてみれば多重能力者だ。

直死の魔眼にLevel 10の空力エアロハンド使い、どちらも能力の副産物と言う訳ではないし。いや、問題はそこじゃない。俺が直死の魔眼を手に入れたのはこの世界の黒羽式が死に触れている状態だからか、転生してからの2択だ。どちらにせよ、佐天の身体で使っている事によって間接的に死に触れている事になる。いずれ佐天が佐天で無くなる可能性が高くなった。

『とりあえず佐天、ソレはお前が使うな』

「(えっ、何ですか——つつつ!?)」

佐天が頭を抑える。

頭の中で棘が刺さって動いているかのように激痛が走る。御坂や白井に気付かれなように顔を軽く擧めただけにしたのは佐天の根性と言うべきか。

『直死の魔眼は視える死に対して脳が保たない。俺は例外があるから大丈夫だが、お前の場合は脳にダメージが行きかねない。てか使っただけで頭痛がするだろ』

型月の『月姫』の遠野志貴と同じ。

直死の魔眼の視える線や点が多い程、脳に多大な負担がかかる。これは、もともとの佐天には死を見るだけのスペックを持たないためである。

「ち、因みに黒羽さんの時平気だったのは？」

『俺はそもそも死に触れ続けてる存在だぞ？ 身体を得ても死に触れ続けたまま、だから俺は死を視る事自体が普通なんだ。頭痛は？』

「(凄い痛みました……)」

『お前は微妙に見えたらしいけど、本来なら非生物を殺す事は出来ない。非生物の線や点が見えるほど使うと、今みたいに頭痛が走る。人間や生物に対してならまだしもな』  
「(人間なら平気……っ、それって!!)」

『死に触れる俺と繋がってるからお前は俺の直死の魔眼を使えるに過ぎない。これは本来、人を殺す事以外には対して役に立たない能力だ。だから慣れちまえば人間の価値観が一気に崩れる。自覚しとけ』

### 殺人衝動。

この眼を持つ限り、死の概念から生じる一種の強迫概念。いや、正確に言うなら『型月』の両儀式や七夜志貴の抑え込まれた殺意とは違う。死の概念を与える黒羽式にとつて死は誰にでも存在する事だから、遅いか早いかの違いと言う事でよく言えば割り切り

派、悪くて無関心と言った所だ。もしかしたら、直死の魔眼を得たのはそんな異常者とも呼べる考えがあるからかもしれない。

故に死を与える事に躊躇はないが、佐天の身体である以上、一定のラインを超えないようにしていた。

だが、張った境界に佐天は踏み込み始めた。

それは自覚したら最後、価値観や倫理観が崩壊し、殺人鬼と変わらない。人を殺す事に何の躊躇もしない存在になってしまう可能性がある。

早く、黒羽式の所在を調べないと。

……と言うかどうかでもいい事かもしれないが、

俺の立ち位置妖精化した魔神そっくりだな。

---

佐天は自宅でネットサーフィンを行っていた。

御坂や白井はあのカエル顔の医者との面会だそうだ。何でも幻想御手レベルアップの使用者が倒

れたらしい。

「はあ。見つからないなあ。幻想御手<sup>レベルアップ</sup>」

『使用した奴等は例外なくぶっ倒れるけどな』

「……えっ？ ま、マジですか？」

『マジだ』

本気で躍起になって探していたわけではない。

<sup>ジキッジメント</sup>

風紀委員が血眼になって探して見つからないものが、自分のような一般中学生レベルのネット技術で本気で見つかるとは考えていなかった。

だが、やはり気にはなった。

やっぱり自分自身が能力者になりたかった。能力も借り物でしかないし、自分が使おうとすればデメリットになる。

そのぐらいの軽い気持ち。

黒羽式がいつかは居なくなるのかもしれない。そうなれば自分は逆戻り、無能力者というコンプレックを抱えたまま生きていくしかない。

「はあ。なんか新曲でも入れようかな」

そう呟きながら、音楽ダウンロードのサイトを開く。

特に目当ての曲がなく、無意味にカーソルをグルグル動かしていると――。

「ん?。」

不自然な箇所で、色が変わった。

「隠しリンク?。」

『ちよつ、それってまさか!?!』

黒羽も驚愕していた。

クリックする。すると、ページが変わり、真っ黒な背景に白の角ばったフォントで、こうあった。

T I T L E : L e v e l U p p e r  
A R T I S T : U N K N O W N

「レベルアップ幻想御手を見つける事に関してはうろ覚えとは言え、よりにもよって一番嫌なタイミングで見つかってしまった。」

佐天は気分が良かった。

希望が漸く手に出来たのだ。それに黒羽は何も言わなかった。それは佐天が無能力者のコンプレックを抱えていた事を知っていたから。手放せなんて口に出来なかった。

丁度初春と街を歩いていると、白井と御坂ともう一人がファミレスで話している所を目撃し、その話に混ざる事になった。

「へえ〜。脳の学者さんなんですかあ〜……………はっ！ まさか、白井さんの脳に何か

問題が!?!」

「レベルアップ幻想御手の件で意見を聞いてたんですの」

初春と佐天は白井達と同じテーブルに合流した。



席順は、奥から白井、御坂。対面に佐天、木山、初春といった感じだ。佐天は幻想御手レベルアップバーが話に出た途端、口元についているクリームにも気づかず、嬉々として話に混ざる。

「幻想御手ですか？ それなら——」

「黒子が言うにはどうやって幻想御手の所有者を保護するかだって」

「……え？」

ジーパンのポケットから音楽プレーヤーを出そうとした佐天の手がピタリと止まる。所有者の保護、それはどう言う事なのか。

「え？ どうしてですか？」

「幻想御手の詳細な情報を得るためっていうのもありますが……ここまできたら、幻想御手に重大な副作用があるのは、ほぼ間違いないんですの。だから、出来る限り使用前にそれを回収するのが今の風紀委員の仕事ですの」

「それに、使用者が容易に犯罪に走る傾向もみられるし、常盤台の眉毛事件に、バイロキネシスト 連続重力子事件、グラビトン 段々と犯罪が強くなってきたしね」

佐天は、先程までの笑顔を固まらせ、ゆっくりと音楽プレイヤーをポケットに戻す。出したくても出せなかった。少しだけ、少しだけでも見つけた希望なのだから……

『……………』

「ん？　どうかしたの佐天さん？」

「い、いえ、なんでもないです！」

御坂に話を振られ、焦った佐天は自身が注文したコーラを、木山の太腿に零してしま  
う。黒羽は珍しく黙ったままだ。

「ん？」

「ご、ごめんなさい!!」

「ああ。気にしなくていい」

そういつて木山は迷わずストッキングを脱ぎだす。

「ちよっ!?!」

『そーいや脱ぎ女か。この人』

一切の躊躇無く、と言うか恥ずかしがる素振りすらない。いつそ清々しいが、こんな場所で脱がれたら露出狂に見える。白井は全力で止める。

「だから！ 人前で脱いではいけませんって言ったでしょうが！ どうしてあなたは――」

ガミガミと、白井による木山への説教はしばらく続いた。

佐天はただ、少しの罪悪感に蝕まれたまま、白井が木山先生に対する説教の声も聞こえていなかった。

「えー、本日は色々教えていただきありがとうございますございました」

「いや、こちらこそ教鞭をふるっていた頃を思い出して、楽しかったよ」

「教師をなさっていたんですの？」

「……昔ね」

その時、木山は眩しいものを眺めるような、だけど少しもの悲しい表情をしていた。黒羽は事情を知ってはいるが、特に何もしないし、何も出来ない。佐天涙子はこの物語では被害者であり、道を踏み外した人間だ。今の黒羽には『幻想御手レベルアップを使うな』と言う事は出来なかった。

結局、木山は皆に微笑みかけると、颯爽と去っていった。  
その時、初春がふと気づく。

「あれ？ 佐天さんは？」

---

その時、佐天は皆と離れ、裏道を走っていた。

音楽プレーヤーをぎゅつと、胸に抱いて。逃げるように裏道を駆けた。

「(やっぱり手放したくない……まだ使った訳じゃないし、みんなに言わなければ……いいよね)」

そう自分に言い聞かせて、好きな人や親友達に明かさないことを正当化する。ただの言い訳に過ぎないという自覚はあるけれど、それでも手放したくない。それが今の自分の最後の希望なのだから……

「(黒羽さん……幻想御手レベルアップバーってどうしてレベルが上がるんですか……?)」

『……A I M 拡散力場、要は能力者から発生している微弱な力を合わせる事で、脳にある種のネットワークを構築する事で自分の『自分パーソナルリアリティだけの現実』に対する演算処理能力が向上する。要するに自分で計算出来なかったので、他人の力を借りる。と言うのがこの幻想御手レベルアップバーの正体だ』

「(副作用……って倒れた人が居るって)」

『最初は大丈夫かもしれない。だが慣れてしまえば、脳が特定の動きしかしない廃人になり、意識を失う。それが幻想御手レベルアップバーのデメリットだ』

やはり使うのに躊躇してしまう。

黒羽の言っている事は本当だ。理論も分からない佐天でも、黒羽が嘘を言った事は無い。信用できる人間だからこそ、コレを使えば黒羽の言った通りの結果になってしま

う。唇を噛み締めた。どうすればいいのか。

「佐天さん！」

呼び掛けられた佐天が振り返ると、そこには御坂がいた。

とっさに音楽プレーヤーをポケットに突っ込む。やっぱり、まだ見つかって欲しくなかった。

「御坂さん……どうして？」

「だって急にいなくなるんだもん。……どうかしたの？」

「なんでもないです！ なんでも！」

佐天は御坂と目を合わせられない。

でも、声だけでも明るくしようと努める。空元気でも、自分は大丈夫って伝えて誤魔

化そうとする。まるで道化だ。

「だって、アタシだけ事件とか、関係ないじゃないですか。……………ジャッジメント風紀委員でも、ないですし」

皆の力になれるような能力もないし、居る意味さえ無い。と、心中で呟いて、ポケットから手を出し、両手を広げて気楽さをアピールする。その笑顔はどこか痛々しい。

あの時の力も結局は借り物でしかない。黒羽式が自分を選ばなかったら、偶然なんて存在しなかったら、きつと今よりもっと悲しくて、絶望していたのかもしれない。自分が、自分だけが扱う事の出来る唯一無二の能力が欲しかった。

すると、ポケットからお守りが落ちた。

「あ」

御坂が拾って手渡す。

「それ、いつも鞄に付けてるやつよね？」

「……………はい。学園都市このまちに来る前、母に持たされました。…………お守りなんて、科学的根拠ゼロなのに」

それは、明るい希望に満ちていた、現実を突き付けられる前の、無知な頃の記憶。佐天が学園都市に入る前の記憶が鮮明に蘇る。

『姉ちゃん、超能力者になるのっ!? すっげえ!!』

『お母さんは今でも反対なのよ…………頭の中を弄るなんて…………』

『はっは。母さんは心配症だなあ』

母親の優しい顔と、優しい言葉が蘇る。

あの時はまだ何も知らなかった。ただ、この場所で現実を知って、それでも足掻いて、どうしても諦めきれなくて…………

『なにかあったらすぐに帰ってきていいからね。——あなたの体が一番大事なんだから』



御坂は、そんな話を聞いて、微笑みながら言った。

「……………優しいお母さんじゃない」

佐天はそれに苦笑で応えて。

自分が抱えていた思いを包み隠す事なく。

「——でも、その期待が重い時もあるんですよ。……………いつまでも、無能力者のままだし」

佐天の言葉に、御坂は言う。

それが辛かった。期待されていたのに、努力しているつもりだったのに、ハードルは一步目にして飛び越えるどころか、前にさえ進む力すらない。期待されていたのに、自分には期待に応える事すら出来やしない。

「レベルなんて、どうでもいいことじゃない」

だが、今の佐天に、超能力者である御坂から発せられるその言葉に何かが崩れた。

自分には手に出来なかつた能力を持つているのに、自分は頑張っていない訳じゃないのに、今までの努力もしてきた意味さえも崩れてしまった。

無価値で無意味で、レベルが上がる事すら期待されない無能。反則してでも手に入れたかっただ力を手に出来なくてもいい、と。それでも……それでも諦めきれなかつたのに。

笑つていう御坂に、佐天は笑い返せなかつた。

踵を返して御坂に背中を向ける。

『レベルなんてどうでもいいこと』なんて、努力して、必死で努力してレベル5になつた人の言葉とは思えないほど皮肉めいていた。

たつたそれだけの言葉かもしれない。それでも足掻いて、諦めきれなかつた普通の少女の心を折るには充分過ぎた。

佐天涙子の精神はその一言で崩れ去つていた。

パァン!!

その時、目の前に居た御坂の頬を自分は引つ叩いていた。

「……………えっ?」

御坂もいきなり叩かれた理由が分からなかった。

ただ、佐天自身も分からなかった。自分と言う殻に閉じ籠もりたいと思ったその時、佐天の心の悲鳴に反応して、表に現れた存在が居た。

『……………レベルなんて、どうでもいい、か。随分と無神経な事を言うじゃねえか。  
超電磁砲』  
レベルガン

泣きたかった。

泣いてしまえたらどれほど楽なのだろう。

成功者になりたかった今までの自分は全部無駄だった、と嘆いていればどれほど辛く笑えていただろう。

けど、それでも。

それでも自分を肯定してくれる人が欲しかった。

自分は頑張って能力を手に入れたいと分かってもらえる人間が居てくれたら、どれほど幸せだったのだろう。

その想いを踏みにじりかけた人間に対し、佐天の『理解者』が立ち上がった。

『お前は人の心が分からないみたいだな。

——  
レベル5  
異常者』

それがきくと、歯車が狂い始めた時だったのだ。



「何でこうなったんだっけ？」

『そりゃあレベルなんてどうでもいいって言われたからだろ。お前心閉ざしたから俺が出たんだぞ？』

「……あ” あ” あああ〜」

『駄目だこりゃ』

心の中でため息をつきながら佐天を見下ろす黒羽。

何故佐天がこうなっているのか。時は18時間前を遡る。

「『お前は人の心が分からないみたいだな。

——  
レベル5  
異常者』」

原作を知っている俺は本来なら出るべきではなかった。

けど、アニメでは見られなかった佐天の表情に、悔しくて握った拳は俺が思っていた以上に辛そうに見えた。

レベル0は欠陥品。

だから佐天はレベルが上がらない事に焦っていた。期待もされていたのに無力で、頑張っても友達と同じようにはなれない。御坂美琴のような能力も無ければ、白井のような優秀さもなく、初春のような必要とされる存在にすらなれない。

『本当、レベル5の癖に他人の感情を読み取る事は疎いよな。能力主義のこの学園都市でレベルがどうでもいいとか何様だ？ レベル5様ってか？』

「佐天……さん？ ……いいや、アンタ誰？」

『別に？ 俺は……まあ佐天涙子の別側面、まあ二重人格にしては色々複雑なものがあるが、そんな事どうでもいいだろ？ 現にお前の前に居るのは正真正銘、レベル0の佐天涙子なんだからよお？』

御坂は口調から佐天から別の存在に変わった事を察した。

『必死で努力してレベル5になった人の言葉とは思えないね。全く、現実から逃げたいからって俺と勝手に入れ替わるなんてよくもまあここまで追い詰めてくれやがって』  
「追い詰めた？ 佐天さんだって頑張れば超能力者《レベル5》にだって、誰だって頑張

ればなれる」

「『無理に決まってるだろバーカ。そもそも無能力者が頑張ってるってないって？ 無能力者が必死になって能力を得ようとしても、結果は伴わないならそれは頑張ってるないからとか言うつもりか？』」

「『レベル1からレベル5にまで昇り詰めたお前は称賛される人間なのかもしれないねえ。けどな、誰もがお前と同じじゃない。能力を求めて、努力してもいつまでもレベルが上がらない人間だっている。俺はさ。お前が心の何処かで佐天涙子を見下している事にキレてんだよ』」

「見下してなんか……！」

「『見下してるね。頑張ればレベル5になれますよ？ まるで今までが頑張ってるねえみてえじゃねえか』」

「『こん……の……!! 言わせておけば!! 力を言い訳にして逃げてるだけじゃない!!』」

「『へえ、それがお前の本音か。失望したぞレベル5、やっぱ思った通り、根は人の心が分からない人格破綻者だったんだな』」

「つつつ!!」



御坂は思わず電撃を放ってしまった。

大した威力では無いが、レベル0が気絶する程度の電撃を苛立ちから無意識に放っていた。

『……ハア、直死』

黒羽は動揺もせずに、飛んでくる電撃に対して線をなぞった。電撃の速度は人間の反射神経より遙かに速い。上条当麻のような前方の予兆でも無ければ防げない中、黒羽は空間ごと電撃を殺したのだ。空気が消えたとかそんな次元じゃない。空間を殺した副次的結果で電撃を回避したに過ぎないが、黒羽にとってそんな事どうでもいい。

何て事はない。この世界が存在する全ては空間と言う自分を広げられる領域があつてこそ存在するのだ。その領域さえなければ物体だろうが電撃だろうが、領域外の世界に踏み込む事すら出来はしない。空間と言う曖昧な領域でさえ殺せる黒羽にとって、なぞればそれで終了、ただそれだけの事だ。

「なっ……嘘……」

『『言い負かされたらコレか。はっ、お前の本質が見えた気がするよ』』

黒羽は背を向けて御坂から離れていった。

佐天本人と御坂美琴が喧嘩した描写など存在しないし、仲違いなどあり得ないが、それでも黒羽式はこの世界を生きている。物語通りに進まなからうが、人の心を汲んでやるのが黒羽式のやり方だ。

「でも手を出しちやいけないと思います！」

『実際手を出しちやったから仕方ない』

「もお〜!!!」

ええい、煮え切らない。

もつと堂々と自分の意見を言いやがれ、と言いたい黒羽。レベルがどうかどうでもいいと言われて心を閉ざすくらいなら反論してみやがれ。と割と横暴な事を思っていた。

『んで？　どーすんだよ。幻想御手はよお？　俺はあんまオススメしないぞ。ぶつ倒れ

レベルアップ

るのは目に見えてる』

佐天涙子は、音楽プレーヤーを片手に道をトボトボと歩いていた。結局、御坂達に渡す事なく

「(幻想御手……あたしみたいなのでも能力者になれるかもしれない……夢のようなアイテム……)」

その音楽プレーヤーに表示されているのは『この音楽を消去しますか?』の問い。消去。キャンセル。どちらかの二択を問われる画面を、佐天は自らの意志で呼び出したが、その先の一步を踏み出せない。

「(得体のしれないものはやっぱり怖いし……よくない……よね……)」  
指がゆっくりと『消去』へと伸びる。

だが、押せない。指が震える。

自分にしか無い能力の夢を捨て切れぬ。

そこに――

「話が違うじゃないか！ 幻想御手を譲ってくれるんじゃないのか!!」

佐天の前方で、男の切羽詰まった声が響く。

「残念だったねえ、ついさっき値上がりしてさあ」

「こいつが欲しけりや、もう10万もってきてよ」

みるからに不良という輩たちが、おそろく喧嘩もしたことがないだろうという青年を脅している。

「だ、だったら金を返してく——がっはあ!!」

不良の一人の容赦ない膝蹴りが青年の腹部を襲う。その後も間髪入れずに、拳、拳、一発殴られるごとに、青年のうめき声や懇願が悲痛に響く。隠れて見ていた佐天が悲痛な顔をする。

「うだうだ言っただけで金もってこいよ!」

「ガタガタうっせーんだよ、デブ!」

そこにリーダーと思わしき金髪でカメレオンのような感情を伴わない目をした男が

現れた。相手は3人、不良で喧嘩慣れしてそうな身体付きに能力まで持っている佐天にも手が出せない。

「おい、お前ら。お前らのレベルがどれだけ上がったのか、そいつ使って試してみろよ」

「はっ！ おいマジかよ、お前終わったなあ〜」

「死んじまうかもな！ キヤハハ！」

「ひっ！ やめろ！ 勘弁してくれ!!」

その光景を、佐天は見ることしかできない。

いや、正確には見ることもできない。

相手側から姿を発見されるのを恐れて、物陰に身を隠しその凄惨の光景を言葉や物音から想像してしまうことしかできない。

「(と、とりあえず風紀委員か『警備員』に……)」

助けを呼ぼうと考える。

それが一番正しく合理的な判断だ。しかし――

「（や、やばっ、充電切れ!?）」

昨日から思索に耽っていたので、携帯の充電を怠っていた。  
万策尽きた。どうしようか、と考える。

しかし正直言ってもう自分にできることは何もないのだ。  
連中はいかにもな男たちが三人、こちらに至っては最近まで小学生をしていたのだ。  
適う訳ない、適う訳ない、が――

「やめなさいよー!」

――逃亡か、挑むか。佐天は後者を選んだ。

なし崩しの勇気を振り絞り、佐天は言葉を振り上げる

「その、人、怪我、してるみたいだし、すぐに警備員が――」

その言葉が最後まで紡がれることはなかった

リーダー格と思われる男が佐天のすぐ後ろの壁を蹴りを打ち込んだからだ。バガン!! と音が鳴り響き、佐天は思わず頭を押さえる

「今、なんつった?」

歯並びが悪いその男が佐天に向かってそういった

「…………え? —— きゃあ!」

男は佐天のむんずと掴みあげ、

「ガキのくせに生意気いつてくれるじゃねえか。あ?」

男は続ける。

佐天は恐ろしくて、立ち竦む事しか出来ない。

「なんも力もない奴が、グダグダ指図する権利はねえんだよ」

「!!」

「（——ああ、やっぱりそうなんだ。力もない自分が、出しやばる事なんか——）」

『……ハア』

黒羽はため息を吐くと、ある事を始めた。

佐天の右手が男に触れた瞬間、周囲の風が掌に凝縮され、前方にそれが弾き出されたような感覚に襲われた。

「ガアアアアア!？」

男が急に吹き飛び始めた。

一体何が起きたのか分からない佐天に対して、周囲の風が佐天の身体を包むように収束していく。

風だ。身体の周囲を風が覆っている。その強さは人を吹き飛ばすレベルの強力さだ。

「……えっ?」

『佐天、今俺がお前の代わりに能力の演算をしてる。今のお前は頑張ってもLevel



3の風力使いまでしか実力を出せないが、まあ使い所だろ』  
エアロハンド

「どうやら上手く行ったようだ。」

確か一方通行も使っていたミサカネットワークによる代理演算。もし俺の思考力や演算処理能力が直接反映されるなら、俺の演算力のまま佐天の能力を底上げする事が出来るかもしれないが試す機会が無かった。

佐天涙子は黒羽式になりつつある。A I M拡散力場が軽く変質しているのも、黒羽式と言う存在に成り代わっていく侵食現象があるからこそ、脳そのものが佐天が届かなかったであろう上の次元へと昇華されていく。つまり、今の佐天は黒羽式の紛い物と言う事だ。

「テ、テメエ能力者か!？」

「オラア!!」

幻想御手レベルアップで強化された念動力《サイコキネシス》で鉄パイプや鉄骨を佐天に向けて放つチンピラ。だが、威力、範囲を自分の極限られた周囲のみなら、風によって鉄骨だろうが受け流せる。飛んで来た鉄パイプは風で動きを封じた後に、佐天の手に握られてい

た。

「す、凄い。コレが黒羽さんの力……」

「へえ、中々やるじゃねえか。能力者だと思わなかったが、まあいい」

『佐天、そろそろ白井が来るぞ』

俺の力はある程度伏せて貰わないと困る。

もう手遅れかもしれないが、俺の能力は良くも悪くも恐ろしいものだからだ。これ程利益になる存在はLevel5を除いて他にいないだろう。

「こんの野郎っ!？」

「ふっ!!」

殴りかかってくる男に対して佐天が風を利用して相手の体制を自分の右へ逸らし、躲した瞬間に男に隙が出来た。

「うりゃっ!!」

「いっつぱ!」

鉄パイプで気を失う程度に殴り付けた。

佐天の周囲に巡る風の循環が、今の佐天に出来る事だ。

半径5メートルに風を循環させて内側と外側にそれぞれ逆方向に風を回す事で鉄骨などの重い物さえ受け流している。一方通行と比べたら見劣りするが、レベル差を考えたら充分な技量に入る筈だ。

「……レベルアップバー幻想御手を使っただんですね」

「ああそうだ。嬢ちゃんも同類だろ?」

同類、無能力者レベル0と言った所だろう。

劣等感に縛られたままの人生に嫌気がする。そんな人種と同じなのかもしれない。

それは佐天が黒羽式イレギュラーに出会わなければの話だ。過程はどうあれ、黒羽式は佐天を選んだ。ただそれだけの事、劣等感に縛られないように立ち上がったヒーローが居たから今、こうして目の前に立っているのだ。

「違います。私はある人から力を貸してもらっているだけです。誇れる事じゃないけど、私を信じて力を貸してくれた人が居るから、私は能力を使えるんです。貰い物だから自分の力でなかったとしても」

「貰い物の力を自分の力と勘違いしているあなたの方が、他人の努力を嘲笑うことなど許しません」

その言葉に被せてきた存在が居た。弱き者の為に立ち上がるヒーローは黒羽だけではない。秩序と自身の正義感にただ従い動くヒーローと言うなら配役は既に決まっていた。

「風紀委員ですの!!」

ジャツジメント  
風紀委員、

白井黒子がそこに立っていた。

「白井さん!」

「佐天さん、貴方まさか幻想御手を?」  
レベルアップ

「使ってません。コレは後で説明します」

黒羽式について色々調べるのには丁度いいのかもれない。どの道、今のままじゃ手詰まりだ。アレイスターか木原が匿っているのかは知らないが、いつかは戻らなければ行けないのだ。

「ははっ！ いきなり現れたって事は空間移動テレポートつてやつだな！ まさか体験できる日が来るとは思わなかったぜ！」

「……………別にあなたを楽しませるつもりでこんな所に連れ込んだわけではありませんの。暴行傷害の現行犯であなただを拘束しま——」

「俺たちやお、幻想御手レベルアップを手に入れる前は、お前達風紀委員にビクビクしてたんだあ」

金髪は凄惨に笑う。この時を待ち望んでいたと言わんばかりに。

「だからでさえ力が手に入ったら、お前らをギタングタンにしてやりてえって思ってたんだぜえー!!!」

金髪は両手を広げて白井に襲い掛かる。

白井は動じない。こんな輩の対処法は心得ている。

襲い掛かる相手の死角はいごにレポートして、後頭部に一撃を叩き込めばおしまいだ。

白井は消える。そして現れる。

目の前に金髪はいなかった。

(え? ……消え——)

「白井さん後ろ!!」

白井は佐天の叫びに反応し、とっさに鞆を盾にする。

レポートした筈の背後から金髪による蹴りが襲う。

なんとか鞆で防いだが、納得はいかない。自分は確かにこいつの背後に移動したはずなのに。

「(くつ、なら飛び道具で! この金属矢を右肩に直接転移する!)」

しかし、その金属矢は金髪の体付近の宙に現れ、金髪にかすり傷つけることなくカラ

ンと音を立てて落ちる。

「(っ!?) 外した!?! この距離で演算を間違えるはずが!?!)」

金髪がナイフを水平に振る。白井はそれを仰け反って回避し、バックステップで距離をとる。

「もう気づいてるんだろう。そうだ。これが俺の能力だ。ここに飛ばされた時点で発動してある。俺にもう空間移動テレポートは通用しねえ」

「どう言う事……ですの?」

白井には分かっていない。佐天は辛うじて見えていた。

直死の魔眼に透明化は通用しない。生と言う存在がある以上、光の屈折で見えなくなるようなものではない。男が見える位置には線が視えず、男とは違う方向に死の線が視えているのだ。

『光の屈折率を自在に操ってるだけじゃ、俺の眼から逃れられねえよ』

「（鉄パイプを本体に投げ付けければ、イケると思いますか？）」

『それスキルアウトの考え方だぞ。まあいい、やれ』

「そおらよ！ もう1発行——ぐほっお!？」

佐天が風力で更に加速した鉄パイプは金髪の男の腰にクリーンヒットした。ゴキッ!! と嫌な音がしたが気にしない。悪党に慈悲は無い。

「テメツ……！ 何で俺の居場所が!？」

「私には屈折現象が効かないので」

そのまま腰を押さえて悶絶する金髪の不良。その光景に白井が何故か死んだ眼で佐天を見た。

「ええ……呆気ない」

「佐天さん貴方意外と恐ろしいタイプですか？」

苦笑して呆れたような口調で白井が話す。



ハハハと笑いながら佐天はポケットから音楽プレイヤーを取り出した。もう隠すのはやめた。どうせこんなものに頼ったって特別になれる訳じゃ無いのだから。

「白井さん、コレ」

「んっ？ それは？」

「レベルアップバー幻想御手です。でも——」

自分の持つ幻想御手レベルアップバーについて誰かに説明しなければならぬ。何らかの副作用があるならやっぱりこれは危険なものだ。もう自分は無能力者であることを悲観しない。力がないからなんだというのだ。

「——もう、私には必要ないですから」

「……そうですの。佐天さんが使っていない事は分かりました。けど、一度支部に来ていただきますの」

「はい……全部、話すつもりです」

「それと」

「？」

改まった白井が佐天に告げる。

本当は風紀委員としてこんな事は言いたく無いのだが、助けて貰ったのは事実だからだ。

「この度はご助力ありがとうございました。これは風紀委員としてではなく、わたくし個人の言葉ということにしてくださいまし」

「……ふふっ、はい」

佐天は笑った。

友達が居る。出来た友達を裏切りたくなかったから踏みとどまる事が出来たのだ。全く、誰かさんには感謝しなくちゃいけないな、と考えながら、警備員に連絡して今回の事件は幕を閉じた。

「あつ、そういえば御坂さんと喧嘩中だった」

「何やりやがりましたの？」

支部に行く足を逆方向に向けて全力で走ったが空間テレポ転移の白井から逃げられる筈もなく、呆気なく捕まった。

## 共犯者 《バッドヒーロー》

アクロバティックかつ理解不能な状況に陥った私こと黒羽式は風紀委員一七七支部ジャッジメントに来ていた。と言うか連行された。と言うか気不味い。帰りたいと佐天自身も逃走を謀った。てか逃走した。それはもうクラウチングスタートでF a t eランサー並みの美しいフォームで。

「逃がしませんの」

「ですよー」

白井さんには勝てなかつたよう、と佐天は呟く。

佐天のスペックは俺の演算を貸し与え、能力を向上させたとは言え、普通の女子中学生がバットを振るえる程度、つまり平凡オブ平凡だ。良くも悪くも佐天は『普通』なのだ。そんな人間が白井の空間転移から逃げられる筈がない。

「うー、白井さん。慈悲とかありません？」

「無いに決まっているでしょう。昨日からお姉様がウジウジしていたのは、まさか佐天さんが原因だとは」

「いやカツとなつちやつてつい……」

「まあ両成敗ですの。お互い喧嘩したままだとこつちまで影響するんですのよ」

流石御坂のストーカーだな、と精神体の黒羽は呟くと佐天さんが吹き出した。不意打ちってズルいと笑ったのを白井に不思議がられた。

『まー、やつちやつたぜ☆と言えはいいのか？』

「言ったら猛烈に殴りたくなるのでやめてください。多分私黒羽さんを殺せますよ？」

『やめてくれ。謝る時はオレが出るから』

直死の魔眼を佐天も使える以上、物事の明確な死を読み取る事ができる。魂然り、意識然り、万物には綻びがあり綻びがない完璧な存在などいない。居るとしたらそれは人の手に負えないものだろう。

と言うか佐天もこの力を理解したせいかな能力が少し怖くなったようだ。この世界では恐らく『原石』扱いだが、佐天涙子は万物、ありとあらゆる存在の死を握る事が出来るのだ。

直死の魔眼は死を与える行為自体は普通に刃を使う。使わなくても殺せるが。問題は死を与える事にこそあるのだ。能力だろうが魔術だろうが、いずれも全てには死の終着点が存在し、虚無に帰す。

『(ある意味直死の魔眼は原点へ帰る力とも言えるな。この世界の処分出来ない魔導書や消えない魔術も、いや下手したら能力だつて永久に殺す事だつて不可能じゃない。早いとこオレの身体を見つけないと利用されかねないな)』

自分探しが当面の目的として、今は不機嫌な佐天を宥めるとしよう。

★★★

「……………」

「……………」

き、気まずいよ！と心の中で佐天は呟く。

一七七支部に集合した初春、白井、御坂、そして佐天の周りの空気が重く感じた。佐天と御坂は顔を合わせた瞬間逸らしてしまうし、初春は察したのか佐天が持っていた『レベルアップバー幻想御手』の解析を始める。

「さて、説明してもらいます。佐天さん、これを一体どこで手に入れたんですの？」

「音楽ファイルをダウンロードするページがあるんですけど、そこに隠しページがあって、それをソフトにダウンロードしたんです。初春に伝えてもう削除されてると思いますけど」

「音楽……『レベルアップバー幻想御手』は音楽だと言うのですの？」

「でも本当に音楽っぽいですよ。調べてみても音楽のそれに近いです」

白井は僅かながら信じられないような目で佐天を見るが、解析が終わった初春はそう告げる。もしかして偽物なんじゃないんですかと佐天が黒羽に頭の中で問いかけるが、間違っではない。

『レベルアップバー幻想御手』の脳内プロトコルを無理矢理破り、一定の脳波に無理矢理矯正する事で演算

能力処理を向上させる。まあ、その副作用で使用者は数日後昏睡状態に陥ってしまうけど。

『まあ、そりや当たり前だ。誰でも簡単に手に入れられて、誰でも簡単にレベルが上がる。まあ電子ドラックに近いようなもんだ』

「……えっ?」

「佐天さん?」

「……っ! アンタ、あの時の!?!」

御坂は気付いたようだが、二人は口調が変わった事に首を傾げる。その直後、白井はある事に気がつく。佐天の瞳が蒼く、宝石のように鮮やかな瞳をしているのだ。

『——よう、超能力者<sup>Level 5</sup>。少しは他人の痛みを理解出来たか?』

「……アンタは……何なの?」

『オレか? オレはまあ……佐天の相棒みたいなもんだよ。まつ、訳あってコイツの中に居座ってる……夢のような存在だ』

「答えになってない!!」



「答えるつもりはない。お前らは目に見える事を全て科学で読み取る癖に、非科学的現象を真つ向から否定する。そんな奴らに教えてもそんな話あり得ないで終わるんだ。要するに時間の無駄」

黒羽自身、御坂美琴は好きじゃない。

別に物語の中では嫌いなキャラでは無かったが、実際に見てみるとなんか違うみたいな感覚だ。嫌いな訳じゃないが、相対すると相性が悪いだけだ。

「オレは別に能力を否定する訳じゃねえよ。ただ、頑張っても、頑張っても能力が上がらない奴だつて居る。お前はそれを努力してないつて上から言ってるからムカつくんだよ。テメエが何を知つてんだよ。オレ弱い奴を無意識に見下してるようなお嬢様が

——大嫌いだね」

「っ……」

「『まつ、殴つた事は謝るよ。だが、お前も少しは他人を見て言葉を使え。じゃなきや、お前の周りから誰もいなくなるぞ』」

腕を組みながら御坂に対して引く気すらない。

だが反面、白井や初春については真逆のメッセージに見えた。御坂美琴がこのままだと周囲に誰も居なくなる、と言っているようだった。

「貴方が一体誰なのかは置いといて、一先ず聞きたい事がありますの」

「『ん、どうぞ。答えられるのには限りがあるがな』」

「先ず、貴方の名前は？」

「『置いとくんじゃないのかよ……黒羽式、つてらしいがそれ以上は分からん。記憶が曖昧な上に、身体が無い状態だ。幽体離脱みたいな感じで佐天を抛り所にしてる』」

「佐天さんはこの事を？」

「『知ってる。能力の底上げはオレの頭脳でやってんだ。同意無しとか犯罪だから』」

割とマジな話だ。

今身体が無いのは死んでいるからではなく、仮死状態だからだ。そこまでは分かるが肉体が無いし、何となく肉体と繋がっている事は分かるが、長時間佐天から離れると繋がっていた感覚が徐々に薄くなるのだ。

「まあ佐天さんが同意している以上、深くは聞きません」

「『そりや助かる。オレも自分の肉体探してるけど、場所が分からないから仮宿みたいなものだ。追い出されたら多分死ぬし』」

「『重症じゃない(ですの)!!?』」

白井と御坂が驚愕する。

魂がどれだけ放浪出来るか不安しかない中で、どうすればいいか分からないし、下手に動くより調べてから動いた方がマシだ。

まあ、それはさておき……

「『<sup>レベルアップバー</sup>幻想御手』については?』」

「『知ってる。共感性を用いて使用する<sup>テストメント</sup>学習装置。音だけで学習装置になるとか面白い発想だよな』」

まっ、コレの考案者は木原幻生だ。

あのクズの発想実現力は半端じゃないが、犠牲など毛ほども興味をかけないイかれ実験者だ。マジさいてーという奴だ。

「共感覚……ああ！そういう事ね！感覚の一部にさえ作用されれば五感全てに働きかける。それを学習装置テストメントにすれば！」

「確かに……理にかなってますわ」

「『まあ大した発想だよ。A I M 拡散力場を繋げて使ったものの演算力を並列に使うなんてな。レベルが上がる理由が分かる』」

「貴方は何故その事を知っているのですか？」

「『正確に言うなら、多重能力者の研究の一部を模して造られた実験だ。オレに関してはA I M 拡散力場に干渉する系の能力者だしな。調べたら案外カラクリは簡単だったぞ』」

これについては原作知識だが。

しかしよく考えられてるな。パソコンのようにネットワークを繋いで並列処理能力マルチタスクを向上させ、能力の底上げを可能にする。

やはり、『木原』の存在が裏に來るとLevel 5まで掌握してきそうだから、嫌いな……いや待て、そもそも嫌い好きとかキャラではなく、なんで俺は明確に木原を毛嫌いしている？

記憶ではあった事すらないのに、どうして木原と言う嫌悪感がある？今のオレは傍観

者に近いはずなのに。

『ともかく、何かの共通点を探せ。オレは用がある』

「用？なんの？」

『カエル医者<sup>の</sup>所。この状態だしな』

「共感覚で作用すると分かれば、<sup>ツリーダイヤグラム</sup>樹形図の設計者が使える筈です！そこから逆算して解除プログラムを割り出せば、この事件の収束に！」

初春が木山に連絡を入れるのを見計らって、オレは一七七支部を後にする。このまま行けば、原作より少し早めに木山は捕まってしまう可能性が高くなった。

御坂美琴は何も知らない。

木山の過去を知らない以上、木山を絶対に止めてしまおうだろう。

原作改変。

それは余りしたくない事だが今回ばかりは、介入してやろう。



「う、おおおつ!!」

佐天は今、『空力エアロハンド使い』を使って気流を操作し、自分を浮かせて屋上から屋上を飛んで駆けている。

空力使いは風力使いとは違い、風を念動力のようなもので操るのではなく、あくまで自分、もしくは触れたものを基点にしか風を起こせない。大気中の気圧や気流の流れくらいなら測るくらいは出来るけれども、演算で能力を向上させているオレも専門分野じゃない。

そもそも、演算出来ていることが不思議なくらいだ。黒羽式であって黒羽式ではない偽物が黒羽式と同じように演算出来る時点で、やはりおかしい。

「凄い凄い凄い!?!でもちよつと怖いんですけど!?!」

『慣れる。オレが演算に失敗するわけないし、お前は着地とダッシュに全力を注げ』  
「なんで地味に偉そうなんですか!?!」

佐天に代わって走らせている黒羽を少し恨めしく思う。まあ能力が使えて、少し楽し

い分で割り切ってはいるけれど。

「木山先生の所に行つて何するんですか？」

『まあ、やる事が二つくらいあるな』

木原に見つかる前に実験で眠っている子供達を起こし、保護してもらう為に子供達を隠している場所を教えてもらう事。捕まった後の釈放後にオレの身体を探してもらう事。

恐らくだが、オレなら子供達を目覚めさせる力がある。

A I M 拡散力場の暴走により昏睡状態に陥つたのなら、オレが介入出来る可能性が高い。

元々、それをやるうとしているのが木山だったわけだし。一万の脳を使い、A I M 拡散力場の暴走を解除させようとした木山なら、その分野に必要な能力者のピックアップくらいしていた……と思う。

『問題は、木山がそれを素直に教えてくれるかなんだけどな』

「黒羽さん……？」

『悪い。今回だけ付き合ってくれ、オレの完全な私欲だけだな』

オレは正義の味方じゃない。

ただ、自分を探す為に交渉を持ちかけようとする自分主義の勝手な人間だ。しかし、それでも最善は尽くす事は当たり前のことだ。

なんだかんだ、オレはオレをクソツタレと思っているのかもな。

★★★

木山のいる病院にたどり着き、部屋の扉にノックをする。「どうぞ」と言う声と共に扉を開けると机で資料を見ながらも、こちらに目を向けた木山の姿があった。

佐天は黒羽に意識を渡し、黒羽は木山を前に視線を向けた。

「君はあの時の……何のようだい？」

『取り引きをしに来た』

「取り引きっ？」

『ああ、オレはお前がやろうとしている事を知っている。木山先生が、こんな事件を引



き起こしてまで行おうとしている事をね』

ピクツ、と僅かに眉が上がった。

それは先生と言う言葉に反応したのか、やろうとしている事に反応したのか。恐らくは後者だろう。

木山は引き出しに隠した拳銃に手を触れる。

ここでバレるわけにはいかない。最悪口を封じてでも実行しなければならない。

「取り引き……だと?」

『——オレはアンタの共犯者になってやる』

木山はその言葉に疑問を抱いた。

共犯者とはどういう意味か、これから自分がやる事に一体どう関係するのか。それを質問する前に黒羽式は木山に告げた。

『だから、アンタもオレに協力しろ。救う手を増やしたいのなら』

ただ、そう告げた黒羽の眼は蒼く染まっていた。